

千葉県最東端に位置する銚子市。その名は、利根川の河口から太平洋へ注ぐ水の流れが、酒器の銚子（長柄銚子や提子）の注ぎ口から酒が流れ出る様子に似ていることに由来するといわれています。

三方を海と利根川に囲まれた銚子は、古くから人とモノの交流によって発展してきました。縄文時代の遺跡からは県内では産出しない黒曜石やヒスイの加工品が見つかっており、鎌倉から室町時代ころには海上交通の拠点として栄えました。江戸時代には利根川水運によって江戸と結ばれ、多くの物資や人々が行き交うまちとなりました。

紀州から移り住んだ人々によって漁業が発展し、醤油醸造業も大きく成長しました。昭和8（1933）年には千葉市に次いで県内で2番目に市制を施行し、県内有数の都市として発展しました。

今回は、銚子の発展を支えてきた地域資産と、その資産を活かした新たな挑戦を訪ねます。



水運が発達した利根川

歴史と景観が息づくまち

港が育てた水産都市

銚子の発展を支えてきた最大の地域資産が港です。

黒潮と親潮が交わり、利根川から豊かな栄養分が流れ込む銚子沖は、日本屈指の好漁場として知られています。こうした自然条件を背景に発展した銚子漁港は、令和4年まで12年連続で水揚げ量日本一を記録した、日本を代表する漁港です。

港周辺では大型漁船が並び、水揚げされた魚が市場へ運ばれ、加工場へと流れていきます。干物や缶詰、冷凍食品などの水産加工業も盛んで、漁業と加工業が一体となった産業集積を形成しています。

魚を獲るだけでなく加工し、商品として全国へ届ける仕組みが根付いていることも銚子の強みで、今もなお、港は地域経済と人々の暮らしを支える原動力となっています。



水揚げ量日本一を誇る銚子漁港

醤油が育んだ産業文化

銚子を代表する産業の一つが醤油醸造業です。

江戸時代、利根川水運の発達によって銚子と江戸が結ばれると、銚子で生産された醤油は大消費地である江戸へ大量に運ばれるようになりました。

この恵まれた立地条件を背景に、ヤマサ醤油やヒゲタ醤油などの醸造業が発展し、銚子は全国有数の醤油産地としてその名を知られるようになり、醤油産業の発展は単に一つの産業を育てただけでなく、多くの雇用を生み出し、市街地の形成や地域経済の発展を支える原動力となりました。

長い年月をかけて培われた醸造技術や企業文化は、銚子ならではの産業文化として受け継がれ、醤油醸造業者は今も地域を代表する企業として全国へ銚子の名を発信しています。



■ 正保2年（1645年）創業のヤマサ醤油



■ 関東風濃口醤油を製造し、江戸の食文化を開花させたヒゲタ醤油

絶景を生み出した大地の物語「銚子ジオパーク」

犬吠埼灯台や屏風ヶ浦は、銚子を代表する景観資源です。

現在の銚子は、単なる「絶景のまち」ではなく、「地球の歴史を体感できるまち」として、ジオパークを通じた地域の魅力発信に取り組んでいます。

市内には約2.4億年前から約10万年前までのさまざまな年代の地層が残されており、市全域が日本ジオパークに認定されています。特に「東洋のドーバー」とも称される屏風ヶ浦は、隆起した土地が浸食され形成された海食崖であり、自然の壮大な営みを物語っています。

銚子の景観はまさに大地と海がつくり上げた歴史そのものであり、銚子ジオパークは大地の成り立ちと人の暮らしの関わりを学ぶ絶好のフィールドです。



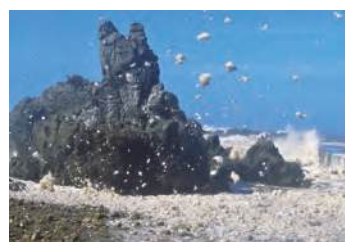
■ びょうぶがうら
屏風ヶ浦



■ めとがはな
夫婦ヶ鼻



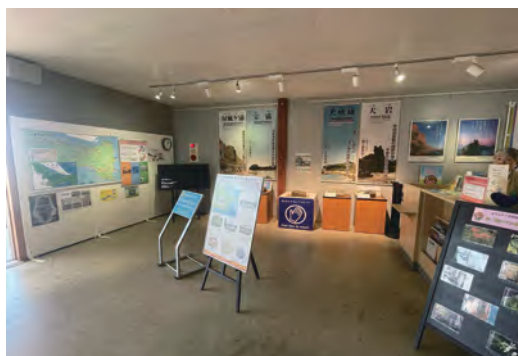
■ いぬぼうさき
犬吠埼



■ いぬいわ
犬岩



■ 銚子ジオパークミュージアム



■ 銚子ジオパークビジターセンター

全国へ広がる銚子の魅力「ふるさと納税」

近年の銚子市を語るうえで欠かせないのが、ふるさと納税を活用した地域ブランド戦略です。

水揚量日本一の漁港を背景とした海産物や加工品、醤油製品などが高い評価を受け、銚子市のふるさと納税は大きく成長しました。

令和7年度の寄附額は約70億円、寄附件数は55万件を超え、千葉県内でトップの実績となっています。寄附の際には、子育て支援や銚子電鉄の応援、ひと・まちづくりなど、寄附金の使い道を選ぶことができ、寄附者の思いが具体的な取り組みにつながる仕組みが整えられています。

また、多くの市内事業者が参加し、海産物だけでなく農産物や醤油製品、地域関連グッズなど多彩な返礼品を展開しています。

全国の人に銚子を「知ってもら」「訪れてもら」「応援してもら」きっかけとして、ふるさと納税という仕組みを通じて交流人口や関係人口の創出につなげ、全国との新たな交流を生み出し、銚子を応援してくれる人々の輪を広げています。



返礼品は約800品目。魚はもちろん、銚子の特産「春キャベツ」や「銚子アムスメロン」など銚子の大地で育った野菜や果物といった魅力ある食材がそろっています。

市民が育てる銚子の未来

銚子市では、地域資源を未来へつなぐため、市民による様々なまちづくり活動が展開されています。

その一つが「銚子元気塾」です。銚子元気塾は、銚子を元気にしたいとの思いを持つ市民有志によるまちづくり団体で、市内で行われるイベントや地域活動の情報発信、企画提案、交流の場づくりなどに取り組んでいます。市民が自ら地域の魅力に目を向け、仲間とともに行動へ移していることが、銚子元気塾の大きな特徴です。

また、市内には、地域団体やボランティアによる環境美化活動や花植え活動、地域資源の保全活動などを支援する「銚子円卓会議」といった団体も存在し、多くの市民が暮らしやすいまちづくりに関わっています。

さらに、銚子市では地域おこし協力隊を受け入れ、地域資源の活用や情報発信、新たな魅力づくりに取り組んでいます。

地域の外から訪れた人々の視点と、地域に暮らす人々の知恵や経験が結びつくことで、新たな活動や交流が生まれています。

中央地区から始まる新たなまちづくり

人づくりとともに、銚子市では将来を見据えたまちづくりも進められています。

現在、市では銚子駅周辺から利根川河岸エリアにかけての中心市街地を対象に「中央地区エリアビジョン」を策定し、歴史や文化、産業など地域資源を生かした新たなまちづくりに取り組んでいます。人口減少や中心市街地の活力低下といった課題に対応しながら、人々が集い、交流し、まちの魅力を体感できるエリアの形成を目指しています。

エリアビジョンでは、「CHOSHI KNOT（チョウシノット）」をコンセプトに掲げています。

これは、漁業や醤油醸造、門前町文化、歴史的建造物、豊かな自然景観など、銚子が持つ多様な地域資源を結び付け、新たな交流や価値を生み出そうとする考え方です。

旧公正會館周辺、飯沼観音門前周辺、銚子駅前周辺を重点地区として位置付け、それぞれの地域特性を活かし、人々が集い、交流し、食や文化を楽しみながら地域の魅力を体験できる拠点づくりが検討されています。

農水産業や醤油産業、歴史文化、銚子ジオパークなど、銚子ならではの地域資産を活かし、新たな交流とにぎわいを生み出す中心市街地の形成が進められています。



旧公正會館パースイメージ

旧公正會館エリア

～大正・戦前の歴史の継承地～



大正時代の建築物「旧公正會館」

門前エリア

～古来より続く門前町と港～



奈良時代創建の圓福寺（飯沼観音）

駅前エリア

～銚子の“顔” 駅前エリア～



駅前のシンボルロード

「風」を生かした新たな産業づくり

銚子市の特徴である1年を通して吹く強い風の力を電気に変え、再生可能エネルギーとして利用することが新たな地域資源として注目されており、市内ではすでに陸上34基、洋上1基の風力発電設備が設置されています。再生可能エネルギーの導入ポテンシャルの高さが、銚子市沖での大規模な洋上風力発電の計画につながっています。

洋上風力の発電事業者とともに地域の活性化や地元雇用の創出など、経済波及効果を長期間に渡って地域に還元することを目的に、風車の運転管理やメンテナンス、視察受入などを行う企業を地元主導で設立し、発電開始に向けた準備が進んでいます。

令和8年2月に選定された脱炭素先行地域の取り組みでは、公民連携で設立した「地域再エネ発電会社」により、新たに大型陸上風力発電設備および蓄電池を整備し、そこで得た電力や収益で基幹産業である水産業を支援するとともに、ワカメ・コンブ養殖などのブルーエコノミー事業を推進するほか、農業や民生部門の課題解決にも結び付け、地域全体の活性化を目指しています。

また、多様な主体で構成される「事業承継・創業支援ラボ」と協働し、戸建て住宅への太陽光発電設備や蓄電池の導入が官民連携のもと進められています。

脱炭素を成長機会と捉え、陸上・洋上風力発電事業の地域展開を通じて、ゼロカーボンシティを宣言し、脱炭素化に取り組むとともに新たな産業の創出・拡大や人材育成につなげることが期待されています。



「洋上風力発電」視察



洋上風力発電



市内の陸上には34基の風車が設置されている